
その他

セブ・フィールドスタディー「課題提起型グローバル英語実践」ふり返り

今井純子^{1)*}, 野村佑子²⁾, 朴シウォン³⁾

【要 旨】

「課題提起型グローバル英語実践」(Global English in Action) は、国際教養学部の2年生以上を対象として、フィリピン・セブ島にて2023年度から実施している海外フィールドスタディー(FS)科目である。このFS科目は、フィリピンでの1週間程の研修(現地訪問、企業訪問、学生交流、プロジェクト)と前後2~3ヶ月で行う事前・事後研修からなる。またこの科目は、グローバル社会の共通語としての英語を異文化でのコミュニケーションに実用し、学内での学習を深め、大学生活、3年次以降の領域学習、将来のキャリア選択に結びつけることを狙いとする。本稿では、本研修の立案にあたっての背景と目的、実施概要を述べた後、2023年度・2024年度に実施した現地研修の様子を詳しく報告する。また、この2年間に研修に参加した全ての学生から収集した振り返りコメントを抜粋し、本FS科目の成果と今後の発展に向けた課題を考察する。

キーワード：フィールドスタディー、課題提起型学習、グローバル英語、協働学習、地球規模課題、持続可能性

Others

Reflection on Cebu, Philippines Field Studies: Global English in Action

Junko IMAI^{1)*}, Yuko NOMURA²⁾, Siwon PARK³⁾

【Abstract】

Global English in Action is an overseas field study (FS) course held in Cebu, Philippines, since 2023 for sophomore and senior students at the Faculty of International Liberal Arts. This FS involves seven to ten days of real-life experiences in the Philippines (field visits, company visits, student interchanges, and project-based learning) and pre- and post-departure sessions for two to three months. It intends to provide a place where the students use English as a lingua franca in a global society for various intercultural communication opportunities, deepen their on-campus learning, and connect their learning to their university life, their studies in three areas from the third year, and their future career choices. This report outlines the background of the development of this FS, its objectives, and the major components of the FS in Cebu, including the details of the programs in Cebu in the 2023 and 2024 academic years. It also presents excerpts from the reflections of all 12 participating students. It concludes by discussing the significance of this FS and exploring how the program could be further developed sustainably in the coming years.

Key words: Field Study, Problem Posing Learning, Collaborative Learning, Global English, Global Issues, Sustainability

¹⁾ 順天堂大学・国際教養学部 (Email: j-imai@juntendo.ac.jp)

²⁾ 順天堂大学・国際教養学部 (Email: y-nomura@juntendo.ac.jp)

³⁾ 順天堂大学・国際教養学部 (Email: s.park.ll@juntendo.ac.jp)

* 責任者名：今井純子

[2025年3月10日原稿受付] [2025年3月10日掲載決定]

本科目の背景と目的

「課題提起型グローバル英語実践」(Global English in Action) は、2015年に開設された順天堂大学国際教養学部で2016年より展開している2年次英語科目 English for Global Citizenship (EGC)、及び2018年からのセブ語学研修の実績を基盤としている。EGCでは、グローバル市民として必要な教養、スキル、考え方の学習を促進するため、6つの地球規模課題(平和・紛争、貧困、ジェンダーの不平等、気候変動、食文化と健康、観光等)をメインとした内容言語統合型学習のモジュールプログラムを週4回展開している(今井, 2021)。モジュール毎のテーマに連続性を持たせ、グローバル課題が単独ではなく、複雑に絡み合うという気づきを促すため、教材や授業内容、タスクの流れや組み立て方を工夫している。必修科目として2年次前期に全学習者が同時履修する「異文化コミュニケーション論」においても、国際コミュニケーションにおける、英語の所有権やモデル、評価基準の転換などについても講義を受けているが、EGCにおいてもまた、多様な英語を素材とする教材を扱っており、英語をグローバル語と位置付け、多様な英語を話す担当教員も揃えている。2018年度からは、各モジュールのテーマを、2015年に国連採択された持続可能な開発目標(SDGs)と結びつけて授業運営をしており、学年末には、グローバル市民としてのアクションプランを、学部全体に向けてポスター発表する成果発表の場を設けている。

一方、EGCの前提科目となる1年次英語科目では、2015年当時は、前期に自他の理解を深めるためのアイデンティティ、後期は異文化コミュニケーションをテーマとして内容中心の英語科目を実施していたが、2017年頃より言語スキルや語学試験対策への重視にシフトした背景を持ち(今井, 2021)、2024年現在はリベラルアーツの内容学習とアカデミック英語のスキル構築に重きを置いた授業を週6回展開している。通常授業に加えて、夏季と春季の長期休暇

期間には、1年生を対象としては、2018年より今日まで、セブ島にある語学学校にてTOEFL試験対策を目的とした語学研修を実施している。同語学研修のために、当時1、2年両学年の英語を担当していた筆者2名が、引率者として現地入りする中、セブの街で見る風景や観光・教育的リソースとEGCで扱うグローバル英語や地球規模課題との親和性に注目し、旅行主催者を含め話し合いを重ねたことが、FS立案のきっかけとなった。コロナ禍の2年間は語学研修も中止が続いたが、パンデミック明けの2022年度に語学研修が再開し、引率を兼ねてFSの下見・打ち合わせをし、学内のタスクフォースと教員研修にて、海外FS研修の企画案を発表し、参加者募集に向けての承認を得た。

企画案作成に当たり、EGCを担当していた筆者らが、履修学生の学ぶ姿勢を振り返り、日々の観察を続ける中で問題点として挙げたことは、(1) EGCでの学びが各授業回や単元ごとに区切られたまま、定着せずに流れ去る傾向と、(2) 他科目で学んだはずの知識やスキルがEGC内での学びに十分に生かされない傾向であった。本学部のカリキュラムやディプロマポリシーに合った教育の実現には、あらゆる文脈や学びの機会を統合する力が必要である。そこでEGCとしては、内容が年間を通じて関連性のあるものであること、科目を横断して活用するべきスキルを育てていることを踏まえ、多岐に渡っているように見えるグローバル課題を統合する力を育てたいという共通ニーズを確認した。最終的には、本FSをEGCや他の英語科目の中だけに閉じず、3領域(グローバルヘルスサービス領域、グローバル社会領域、異文化コミュニケーション領域)での学びやキャリア選択にも生かす刺激を与えられるような、また学びを自分に直接関係のあることとして捉え直せるような、インパクトのある海外研修を企画することを目指した。そこでEGCとの連動を強化するため、現地担当者に依頼をし、訪問が可能な場所のリスト化と各訪問先での学習内容

のSDGsへの紐付けを依頼した。またSDGs関連のワークショップでの繋がりを通じ、現地学生交流に向けて話し合いを開始した¹⁾。

本FSの設計にあたっては、EGCの授業内容との一貫性を保ちつつ、短期海外フィールド学習が持つ教育的効果に関する先行研究の知見も積極的に取り入れた。近年の研究では、短期間の海外フィールド学習が学生のグローバル市民としての意識形成を促進し、特に現地体験と批判的振り返りの組み合わせが異文化理解の深化に寄与することが示されている。また、現地コミュニティとの直接的な交流を通じて、共感と社会的責任感が養われることも報告されている。これらの知見を踏まえ、本FSでは単なる見学型プログラムではなく、現地での対話と協働を重視し、学生が主体的に学びを深める構造を採用した。これらの知見をさらに教育理論の観点から補強するために、本FSは以下の理論的枠組みに基づいて設計されている²⁾。本FSの理論的基盤は、フレイレ(2018)の課題提起型学習(problem-posing learning)における「対話」と「意識化」の概念、ヴィゴツキー(Vygotsky, 2012等)の社会文化理論に基づく協働学習、国際英語論におけるグローバル語としての英語(Crystal, 2003等)の考え方である。本FSでは、学生がセブでの直接体験を通して「他人ごと」から「自分ごと」へと認識を変容させるプロセスを重視し、学生同士や現地の人々との対話的相互作用による知識構築を促進している。そのため、本FSでは、学生が自身の経験を理論的な枠組みの中で再解釈し、主体的に学びを深化させることを促している。また、さまざまな場面で、ペアやグループでの学びや、グローバル語として日々の英語の学びを实践する場を設けた。

以上の背景を踏まえ、セブFSの第1の目的は、地球規模課題について英語を通して学ぶEGCにおいて培ったグローバル英語とグローバル課題について理解した内容を、海外における異文化コミュニケーションで実践することである。第2に、「かわいそうな人々を自分が助

ける」といったひとりよがりなグローバル課題を他人ごとと捉えるような思考を、参加者一人ひとりが乗り越え、グローバル課題の複雑性を多面的に分析し、「自分ごと」として捉え直し、持続可能性の達成に向けて主体性を持ち意識を新たにすることを狙いとする。第3に、海外での体験を3年次からの領域選択や専門的学習、卒業後のキャリアビジョンの形成に連動することを目標とする。更には、帰国後の成果報告などの学部コミュニティへの学習成果の還元を通して、身近の人々の気づきや意識変革へと結びつけるアクションを起こすことにある。

これらの目的を達成するため、事前準備、現地での実践、事後の振り返りを学生たちが主体的に取り組めるよう、現地での学ぶための問いや課題を学生主導で設定することを必須とした。具体的には、事前研修では、参加学生が引率者との話し合いを通して、注目する課題をリスト化し、ペアやグループで現地訪問先について事前に調査したり、参加学生が自ら課題を設定し現地で遂行するプロジェクトに向けて準備をしたりする場とした。現地においても、毎日の体験について、その日のうちに学生自らがまとめて報告したり、議論したりするミーティングの時間を設け、新鮮な記憶をもとに体験を考察し、学びを最大化する振り返りの機会を取り入れた。事後研修では、振り返りの話し合いを行い、グループ全体やプロジェクト単位のペアで成果発表の準備を行なった。本研修は2年生を主な対象とし、事前・事後研修を含んでも半年間の学びであることから、課題解決への第一歩として貧困などのグローバル課題を主体的に捉える「気づき」をもたらすことを、実現可能なゴールとした。また、帰国後の報告会で、聴衆にも学びの成果を波及し、広範囲の意識変化を促すことも到達目標とした。

科目実施概要

本FSの主たる研修は9月に1週間～10日前後で行われるフィリピン・セブ島の訪問であ

るが、出発前（6～8月）に行われる事前研修と帰国後（10～11月）の事後研修を含めた全行程を完了して2単位が付与される。2023年度、2024年度とも、事前研修は全体で3回行い、各回の間に個人・ペアでのワークを行なった。個別のワークとしては、人物交流に用いる自己紹介スライドを作成し、現地訪問、企業訪問、交流会の役割分担を決め、訪問先の詳細や注意事項、現地の文化・言語・教育状況、持続可能性に関する取り組みについて事前調査を行い、全体に共有した。また、ペアでプロジェクト（ミニ・リサーチ、ボランティア等）を企画・立案し、事前調査や準備を進めた。

現地では、グループ全体で決めた学習目標に従い、現地でのグローバル課題に関する取り組みの見学・体験・ボランティア活動、ものづくりや観光事業を行う日系企業の見学・インターン、教育の機会均等・ジェンダー平等・持続可能性・公衆衛生や健康（病院・保健センターなど）促進に関する事業を行う組織を訪問する。また、現地大学生、現地企業で働く人々と交流し、インタビュー等を行う。平日の午後や週末にペア・プロジェクトを実施する。研修中は毎晩、参加学生と引率教員で集まり、振り返り活動を行い、各自の学習成果や心境の変化につい

てグループで共有する時間を持つ。

2023年度は9月10日(日)から9月20日(水)まで11日間で、引率者2名（今井、野村）が4年生1名、3年生5名、2年生2名を伴い、図1に示す日程でFSを実施した。初年度のため多少余裕を持たせて行程を組んだ。

2024年度は9月1日(日)から9月8日(日)まで8日間で、引率者2名（今井、朴）が3年生4名を伴い、図2に示す日程で実施した。2023年度の実施（11日間）では、食中毒による腹痛など体調を崩す者や、タクシー乗車時にトラブルに巻き込まれるケースも見られた。これらの経験を踏まえ、2024年度はプログラムの内容を維持しながらも、学生の健康と安全に配慮し、よりコンパクトな日程での実施を試みた。

帰国後の成果物として、2023年度は、研修全体（現地訪問・企業訪問・学生交流・プロジェクト）についてのレポートを執筆した。2024年度は、プロジェクト学習について個別にレポートを執筆し、研修全体についてのV-log映像にペアで制作した。事後研修は、全体で2回実施し、初回に成果物をもとに振り返りとスライド作成を行ない、11月末の平日の昼休みに、成果発表会を学部公開で行い、参加者以外の学生や教職員が聴衆として多数参加した。また、

1週	9/10 (日)	9/11 (月)	9/12 (火)	9/13 (水)	9/14 (木)	9/15 (金)	9/16 (土)
午前	セブ到着	ゴミ山	病院	水上スラム	企業訪問	コールセンター	プロジェクト
午後		プロジェクト	プロジェクト	プロジェクト		プロジェクト	一般家庭
2週	9/17 (日)	9/19 (月)	9/19 (火)	9/20(水)			
午前	プロジェクト	プロジェクト	教育省	成田帰着			
午後			交流会				

図1. セブフィールドスタディ実施行程 (2023年度)

1週	9/1 (日)	9/2 (月)	9/3 (火)	9/4 (水)	9/5 (木)	9/6 (金)	9/7 (土)
午前	セブ到着	ゴミ山	墓地	動物シェルター	企業訪問	一般家庭	プロジェクト
午後		水上スラム	プロジェクト	プロジェクト		交流会	
2週	9/8 (日)						
午前	成田帰着						
午後							

図2. セブフィールドスタディ実施行程 (2024年度)

各年の実施概要、学生によるレポート、各訪問先で撮影した集合写真、研修についての学部ホームページやSNS上での広報記事、編集後記を、1冊の報告書としてまとめ、成果発表会の参加者に閲覧した他、参加学生と教職員向けに印刷・製本をし、配布した³⁾。

なお、本報告を含む研修実施報告や研修の効果・意義を知り今後の研修に活かす教育研究の取り組みのため、学生の振り返りデータは、毎晩の振り返りミーティング記録、研修中の日誌、帰国後のレポート、発表内容から収集した。具体的には、これらを教育目標に沿って分類し、特に研修前後での認識変化に着目して「他人ごと」から「自分ごと」への変容プロセスを分析した。

海外研修の内容

本章では、2023年度、2024年度に実施した具体的な海外研修内容を現地訪問、企業訪問、学生交流、ペア・プロジェクトの節に分けて報告する。

1. 現地訪問

現地訪問先は、2023年度は可能な限り学生の興味（医療関係など）とEGCカリキュラムと並行する内容（ジェンダーなど）に基づいて決定し、2024年度については、前年度に学生に好評で現地住民の生活について比較可能と思われた3箇所を残し、新規に2箇所を訪問した。

1.1 ゴミ埋立地(通称ゴミ山)と近隣集落(2023年, 2024年)

2年連続で、イナヤワン地区にあるゴミ廃棄場(Inayawan landfill)を訪問し、通称ゴミ山から得る資源で生計を立てる集落の家族と交流した。フィリピンでは、健康被害が多く出たことから大気汚染防止法が施行され、1970年頃からゴミ焼却が禁じられている。その結果、家庭や事業所から出た廃棄物は焼却されずにゴミ山として積まれている。

イナヤワン地区には1995年にJICAの支援で衛生埋立地が設置されたものの、想定を超える規模で埋立地が広がったため、閉鎖が繰り返されたが、現在も、セブ市唯一の廃棄物最終処分場として、家庭ゴミ、可燃・不燃・資源・粗大ゴミなどの一般廃棄物、レストランの食べ残しやモールや店舗、衣類、医療廃棄物を含む産業廃棄物が分別されないまま、大型トラックにより運び続けられている。地域全体の水捌げが悪く、食べ残しや衣類、袋や生ごみ、鉄の柱や粗大ゴミ、大型ゴミ、缶や瓶などが山積みされており、悪臭が漂っていた。なお、近隣や廃棄場内には、移動費がかからないということからゴミ山に敢えて住む人々が集落を形成しており、毎日トラックで運ばれるゴミの中からお金になる金属や瓶、プラスチックを見つけたり、ゴミを素材として物を作り、市場などで売ったりして生計を立てている。2年連続で訪問した家庭では、家主である女性が、ゴミ山に捨てられた枕やぬいぐるみから綿を取り出し、洗濯した上で、縫い直し、市場に出荷して、孫娘を含む娘家族も1人で養っていた。なお、ゴミを資源として売ることによって、平均賃金の3～4倍の収入を得られる家もあるという集落の中には、ゲーミングコンピューターやモニターが並び、Wi-Fi環境も整い、若者が集う店舗も見られた。

1.2 水上スラムと自宅訪問(2023年, 2024年)

マクタン島とセブ島を結ぶ赤い橋(日本のODAで建設された通称オールドブリッジ)の麓、セブ島への入り口であるマンダウエ市側の海上に広がるスラム街を2年連続で訪問した。この地域は行政が認める住所ある土地であるものの、フィリピン各地の離島からスクワッター(squatter)と呼ばれる不法占拠者が自然発生的に集住している。台風で被害を受ける度に空いた所に筏や廃材で作った小屋を継ぎ足していくため、拡大し続けており、通路が狭く、街灯もなく、足元も不安定である。2022年11月深夜に大火災が起こり、緊急車両も入れず街全体が

消失したということであったが、2023年9月には、既に約半分の家や店舗が建て直されていた。海上沖にある大きな家にはキッチン、シャワー設備、居間には大型テレビが2台あり、家主は高級腕時計を身につけているなど、暮らしぶりは快適な様子であった。2024年9月に再訪問すると、前年に焼け野原であった所にも、家や小売店が立ち並んでいた。ゴミや排泄物、洗剤を海に流している様子や、近くで泳ぐ子どもを見かけ、住民の健康を懸念する学生が多かった。

1.3 一般家庭の訪問と子供たちとの交流(2023年, 2024年)

2カ年とも現地滞在の後半に、セブの一般家庭を訪問した。2023年FSで訪問した家庭は、夫婦と小学生の息子2人の4人家族で、迎えてくれた女性(母)は公務員として仕事をしているとのことだった。訪問の1週間前に豪雨による洪水で家が半分流されてしまったということで、残された1部屋に全員で床に寝ている様子で、残された家財道具も床上に上げられていた。子どものほとんどは平日の昼間は学校に通っているが、土曜の午前中は学校がないため、子どもたちが広場に集まっており、参加学生から文具を贈呈し、バスケットボールなどをして遊ぶなど交流を行なった。2024年FSでは、川に向かった急な土手のようにになっている地域に立つ一般家庭を訪問した。家主はとうもろこしを茹でて集落入り口の大通りにあるお店で売って生計を立てていた。こちらの家庭は9人家族で斜めになった壁側に建てた2部屋のみの質素な住居だった。集落の通路は狭いものの、大通り沿いには小売店が並び、ゲームセンターなども設置されていた。どちらの訪問先も集落全体で子どもを育てている様子が見られた。

1.4 公立病院と看護師長による講話(2023年)

エバースレイ・チャイルズ療養所・総合病院(Eversley Childs Sanitarium and General Hospital)

を訪問した。ここは、フィリピンに8箇所あるハンセン病療養所の1つとして1930年に設立され、現在も入所者の治療を続けつつ、2002年からは公立総合病院として、500床規模で、外科手術、救急医療、入院、一般診療の提供を行っている。現地では、非常に多くの患者が待機する待合室、救急外来の病室、新生児室、最新医療設備を設置した部屋を見学した。また看護師長から、フィリピンの医療制度、貧困層の医療保険加入状況、保証金制度、コロナ禍での対応など講話を受けた後、病院長と面会した。

1.5 コールセンター見学とジェンダーに関する現状(2023年)

オンラインでマンツーマンの英会話レッスンを行う語学学校のコールセンターを訪問し、講師のほとんどが女性である様子を見学した。また、コールセンターに行く途中に立ち寄ったスーパーマーケットにおいても、金を扱うレジ打ち係や管理職の殆どが女性であると説明を受けた。ガイドの女性、語学学校の責任者、食堂で働く女性と話し、フィリピンにおける女性の社会進出がアジア一位である一方で、男性が働かない、親が子どもを頼りにするなど、女性が主要労働力とされる背景や現実について、率直な意見を伺った。

1.6 市教育事務所と主事による講話(2023年)

セブ市に隣接するマダウェイ市の教育事務所を訪問し、教育主事の方と面談し、フィリピンの教育制度と、フィリピンの価値観、愛国心に加え、コロナ禍からのレジエンスの要素も含め刷新されたMATATAGカリキュラムについて説明を受けた。また、現地ビサヤ語、フィリピンで広範囲に使用されるタガログ語、英語を、コミュニケーションスキルを重視して取り入れる実践状況について話を伺った。教育事務所の壁には人事の構成図が貼ってあり、また小・中学校も併設されており、保護者が待機する様子も見られた。

1.7 墓地で生活をする世帯の訪問（2024年）

セブ市中心部カレタ地区にあるチャイニーズセメタリー（Cebu Chinese Cemetery）を訪問し、墓地に住む貧困層の住民の暮らしぶりを見学した。この墓地は、中国人コミュニティの富裕層向けに1909年に建設されたもので、石造りの大きな墓が建ち並び、管理者を通して所有者から許可を得て、600世帯もの貧困層家族が何世代にも渡って墓の下部や周囲を一軒家の自宅のようにして生活をしている。学校に通っていない子どもが多く、訪問した際は、墓地にある広大な庭で鬼ごっこをして遊ぶなどの交流活動を行なった。

1.8 アニマルシェルターの訪問（2024年）

2024年度FSでは、セブ市北西部グアダルペ地区の人里離れた山の中にある動物保護団体MARO（Mayari Animal Rescue Organization）を訪問した。セブでは、野犬、野猫が多く見られるが、この団体では、虐待や放棄、ゴミのように遺棄された犬猫を保護し、ボランティアによる餌やり、シャンプー、リハビリを経て、希望者へ譲渡している。訪問時も、塀で囲まれた半屋外施設の1階に犬が40匹以上が放し飼いに、2階では子猫30匹以上がゲージ内で飼育されていた。スタッフから、現地の犬猫事情や団体の活動について話を聞いた後、犬の散歩を体験した。

2. 企業訪問

研修の中日には、セブ地域に工場や事業所を持つ日系企業の訪問を行い、工場と会社の見学を行い、日本からの駐在員を始めとする職員の方から会社概要や持続可能性への取り組みについて話を聞き、現地従業員の方へのインタビューや交流会を行った。2023年度は大手の建機用を主要とする産業機械用フィルターの国内シェアの7割、他にもエアフィルターやマスクなども製造するヤマシンフィルター株式会社のセブ工場を見学した。2024年度はダウンラ

イトやスポットライトなどのLED照明器具を住宅、店舗向けにOEM製造する株式会社KOWAのセブ工場を訪問した。どちらの会社も、マクタン島の経済特区にセブ工場を構えており、日本からの駐在員数名を中心に、何百人もの現地職員の中から管理職や技術職を育成するなど組織だった配置をしており、管理職を含む現地職員の7割以上が女性であった。また、日本が得意とする技術や細かい作業、従業員同士の挨拶の徹底などの企業文化を伝える一方で、製品の長寿命化による環境負荷低減、資材の現地調達、人権、地域習慣、宗教、文化の違いを尊重した職場環境への配慮など、持続可能な社会を目指した事業を展開していた。駐在員や日本国内から合流いただいた本社職員の皆様から話を聞き、日本の製造業の世界での活躍について学ぶ他、歳の近い現地職員と交流を通して、それぞれの興味・関心に基づいた話を聞くなど、有意義な訪問となった。

3. 学生交流

研修最終日の午後には、2023年度、2024年度とも、Passerelles numériques (PN) の協力の元、現地大学生との交流会を実施した。PNは、フィリピン全土の島嶼部や村落地域の貧困家庭を対象に、学力試験や面接、直接訪問による家庭環境や貧困度の精査や親との面談を通して、優秀な学生を毎年100名程選出し、市内中心部にある学生寮で生活をしながら、サンカルロス大学でコンピューター関連の専門職学位が取れるよう、奨学支援を行なっている団体で、現地代表者やフランス本部からの派遣職員その他、数十名の教育スタッフが支援業務に従事している。交流会では、国歌斉唱やアイスブレイクのアクティビティーの後、日本側の学生から大学、学部、現地での研修内容を紹介し、フィリピン側の学生からもNGOの奨学制度やセブでの学生生活について紹介があった。その後、地球規模課題のテーマ毎に日本・フィリピンの学生合同の小グループに分け、ディスカッションを行い、

各グループの代表者が課題解決に向けた提言をサミット方式で全体報告した。2 ヶ年共、全体運営をホスト側である PN が企画し、会場となるホテルのカンファレンスルームと軽食の手配を本学で行う形式で今後も継続予定である。日本人学生一人につき複数名の現地学生をペアリングして活動をするため、英語が不得手な学生も必ずコミュニケーションをとる環境になるため、どの学生も積極的に自己紹介や議題の話し合いを行っていた。

4. ペア・プロジェクト

現地訪問や交流の予定が入らなかった時間帯（主に午後）と週末はペアでのプロジェクトの時間にあてた。プロジェクトは、事前研修を通して立てた計画を基に、ペアで水質調査、ゴミ処理、ストリートチルドレン、食文化と健康等のテーマを決め、プロジェクトを実施した。以下に2 ヶ年度のペア6組のプロジェクトの概要と結果を、各年度の報告書に掲載した学生レポートを元に要約する⁴⁾。

4.1 セブの水質調査 (2023 年 N. T. & G. S.)

現地で訪れた様々な場所（ホテル、プール、一般家庭、水上スラム等）から水をペットボトルで採取し、ホテルに戻った後、日本から持参したパックテスト式の COE 測定水キットを使い水質調査を行なった。水上スラムから摂取してきた水の COE 値が最も高く、生活排水や汚水が含まれている結果であった。ゴミ廃棄や下水道等の整備不足が水質汚染につながっていると考察できた。

4.2 ゴミの分別状況 (2023 年 A. A. & K. M.)

ショッピングモールのゴミ箱設置状況と中身の確認、訪問先企業での現地職員へのインタビューを通して、ゴミの分別の現状を調査した。モールのゴミ箱は可燃・不可燃・リサイクルで分かれているものの、中身は概ね混在していた。裕福な家庭では環境問題を配慮し分別するもの

の、貧困層には分別意識がうすく、街頭でのゴミのポイ捨ても当たり前になっているということであった。

4.3 食生活と健康の関係 (2023 年 T. S. & S. A.)

食生活と健康に関する質問をスケッチブックに書き、訪問先で会った人々に当てはまる回答にシールを貼ってもらった。ファーストフードでチキンやスパゲッティを食べる頻度が高く、暑い天候から日常的に運動する人は少なく、学校で栄養素や食事バランスを学ぶ機会はないが、貧困層でもナスやカボチャを野菜として食べており、食事バランスを意識している人も多かった。

4.4 ストリートチルドレン (2023 年 N. A. & F. H.)

ストリートチルドレンの状況を知るため、訪問先や街中でインタビューを行い、併せてセントニーニョ教会周辺を観察した。セブでストリートチルドレンに見える子どもには (a) 平日昼間に小売りをし、夜間学校に通う子ども、(b) 平日は学校に通い、休日のみ小売りをする子ども、(c) 家族がいなく孤児院から学校に通う子ども、がいることが分かったが、いずれの子どもたちも学校に通っている様子であった。

4.5 日本とフィリピンの食文化 (2024 年 A. H. & S. R.)

日本とフィリピンの食文化の違いや日本食の受容状況を知るため、食材や味の比較や訪問先で会った20名にインタビューを行なった。全員が鶏肉を好物として挙げた他、日常的には野菜炒めや卵、魚、マルンガイ（薬物野菜）を食べていた。日本食のチェーン店では、甘く酸味のある醤油やバナナから作られたケチャップを使うなど、現地に住む人の味覚に合わせた工夫も見られた。

4.6 フィリピンの口腔衛生（2024年 S.M. & M.N.）

セブの子どもたちの口腔衛生の状況を知るため、3つの集落（ゴミ山、海上スラム、墓地）と一般家庭の訪問時に会った3～12歳の児童31名を対象に、歯ブラシの頻度や方法などを質問し、お礼に日本製の歯ブラシを贈呈した。ゴミ山や海上スラムの児童10名は全員に歯ブラシの習慣があった一方で、墓地に住む児童11名の半数、一般家庭の児童10名の内9名に歯ブラシの習慣がなかった。

学生による振り返り

本研修は、事前・事後・現地研修を通して、振り返り活動を重視している。成果物の一部であるレポートでも、各学生、振り返りコメントを残しており、本報告では、全ての参加学生の振り返りコメントの中から、特に注目に値すると思われるコメントを敢えて編集なしで、抜粋して紹介する⁹⁾。

一般企業で働くより、ゴミ山近くに住んでゴミを売って暮らす方が稼げるため彼らはそこに住んでいます。つまり、貧困から遠ざかるためにあえてそういう選択をしています。これはフィリピン（セブ）における貧困問題を象徴する問題の一つであると感じました。（2023年、p.2, N.T.）

セブ島を訪れる前にスラム街の人たちは悲しみながら生活をしていると想像していましたが、実際はとても幸せそうに生活をしていました。その日のご飯すらも食べれるか厳しい状況にあるにも関わらず笑顔で生活する人たちを見て、人それぞれ幸せの基準は異なっているということを考えさせられました。（2023年、p.7, A.A.）

住んでいる人を見てお金がなくとてもかわいそうな気分になりましたが、話によるとこの

ゴミ山に住んでいる人たちは自らゴミ山を選んで住んでいるそうです。[中略] これを聞いて今までゴミ山などのスラムに住んでいる人に対して貧しいイメージを持っていた自分の感覚が180度変わりました。そしてゴミ山にある一つの家族を訪問した際には、Wi-Fiや何台ものゲーミングチェアなどがあり、子供たちはインターネットを通じて日本のOne Pieceを見ておりとても驚きました。今回のことから世界で起きている出来事は実際に自分の目で見てみないとわからないものであると感じました。[中略] ゴミ山問題と一括りにしてもそこには、環境、教育、労働、健康など様々な国の問題があり、解決には時間と他国からの協力が必要であると感じました。（2023年、p.13, K.M.）

3つ [ゴミ山、海上スラム、一般家庭] 全てに共通していたのは、いつ家を失うか分からない環境にいるということだった。[中略] 努力で欲しいものは手に入れることが出来ても、家自体がなくなってしまえば、その努力も水の泡になってしまう。彼らの寂しそうな表情がなくなるように、自然災害に強い家・まちづくりを進め、住み続けられるまちを実現して欲しいと思った。（2023年、p.18, T.S.）

現地の方々と同じ目線に立って物事を捉えたことで、セブ島の本当の姿を見ることができました。この研修に参加したからこそ知ることができた世界であり、インターネットの情報だけでは想像もできないような現状を目にすることができ、とても良い経験となりました。（2023年、p.24, N.A.）

フィリピンにおける女性の社会進出は注目に値するが、その背景にはいくつかの課題や文化的要因が存在する。「女性の社会進出＝ジェンダー平等の象徴」ではないということに初めて気がつくことができ、多角的な視野を養うことができた。[中略] 海上スラムを訪問した中で

特に印象に残ったことは、子供から大人まで、そこに住む人々が彼らの生活に満足していて、幸せそうに暮らしていることである。日本に住む私たちと、彼らにとっての当たり前が異なるだけで、幸せの定義は人それぞれであり、イメージだけで彼らを可哀想と思うこと自体が失礼なことであるということに初めて気付かされた。(2023年, p.29~30, F.H.)

これら[研修全体]を通して貧困や賃金格差、ごみ問題といったフィリピンに数多くある社会問題はすべてがつながっており、解決するためには視野を広く持つことが重要と考えた。[中略] フィリピンは圧倒的な女性社会であるということである。スーパーマーケットでもお金を扱うレジには必ず女性がおり、女性が責任を持つ立場にある。フィリピンは女性活躍先進国として知られているが、これらは伝統からきているものであり、実際は男女平等社会が築かれているとは考えられない。男女平等の社会を作り出すことが課題だと考えた。[中略] ゴミ山の住人はフィリピンでは普通に働くよりゴミを売って稼いだほうが儲かるのでそこに住んでおり、海上スラムの住人は土地代がかからないというメリットを求めそこに住んでいる。このようにフィリピンにおける開発の問題は社会のシステムや貧困問題と密接に関わっており、解決には根本的な問題の解決とその支援が必要不可欠であると考えた。(2023年, p.35~39, G.S.)

生徒たちと話して、奨学生であり続けるために並々ならぬ努力が必要であると知った。奨学生に選ばれるには、家庭の経済環境や本人の学力、親との面談など様々な条件が必要になる。選ばれた後も、朝7時から夜の9時まで授業が組まれており学校にいる間はスマートフォンを利用してはならない、勉強に専念する為に異性と交流を持ってはいけないなど厳しいルールがあると知った。それでも将来は良い職につき、高い給料を稼いで家族を幸せにしたいと言って

いた強い姿勢がとても印象に残っている。(2023年, p.42, S.A.)

海外の料理が日本仕様になっている場合があり、現地に行かないと本場の料理と比べることはなかなかできないので海外に行った際はぜひ日本料理と現地の料理の特徴を比べてみるとより一層食を楽しめると思います。また今回のプロジェクトでは食を通して異文化を感じることができ、日頃から講義で行うような内容も目で確認できたのでとても良いプロジェクト内容だったなと思いました。(2024年, p.5, A.H.)

実際に現地を訪れ、現状を目の当たりにすることで、教科書だけでは得られない気づきや感情が生まれたと思う。[中略] 英語が苦手な1人では参加する勇気が出ず、一緒にセブ島に行こう！と言われて軽いノリで参加しました。実際セブ島では自分の思ったことを全て英語で伝える事は出来なかったけど、簡単な単語や身振り手振りで何とかコミュニケーションを取ることができ、自分の見た事のない知らなかった世界を知れてとても良い経験になりました。自分の力で現地の人とコミュニケーションを取れたことが嬉しかったし、もっと自分の気持ちを伝えたいと感じました。(2024年, p.12~13, S.R.)

フィリピンというアジアにある比較的近い国なのに、日本とは環境が180度違います。学校に行けることが当たり前ではないし、インフラが整っているのは戦後日本で懸命に生きてくれた先人がいたからです。是非、観光目的で海外に行くだけではなく、その国が抱える問題点にも目を向けてみてほしいです。(2024年, p.17, S.M.)

フィリピンはリゾート地として有名な一方で、同時に多くの人々が貧困に苦しんでいるという現実を目の当たりにし、強く心を動かされた。特に、ごみ山での生活やスラム街の劣悪な

環境は、日本では想像もできない状況であり、そこで生活する人々の逞しさと、その一方で感じる無力さに深く考えさせられた。また、現地の人々が直面する課題に対して、外部からの支援だけでは十分でないことも痛感した。地元のリーダーやコミュニティが主体的に問題を解決する力を育てることが、長期的な改善につながるということを学んだ。このような自立的な取り組みを支援する国際協力の重要性に気づき、今後どのような形で自分が貢献できるのかを考えるきっかけとなった。また、文化や価値観が異なる人々と接し、協力していく中で、異文化理解の大切さを改めて感じた。異なる背景を持つ人々とオープンな姿勢で対話をすることが、誤解を避け、真の理解を築くためには不可欠であると感じた。(2024年, p.21, M.N.)

研修成果と今後の課題

本研修の成果としては、参加したほとんどの学生が、EGCの授業回や単元毎に分断されることの多かったグローバル課題について、互いに関連するものとして多角的かつ総合的に見るようになった様子が見られることにある。参加した学生の多くは、当初、現地における課題を「他人ごと」と捉える様子がうかがえたが、現地での研修期間中に大きな成長を遂げ、自らの視点で問題を捉え直し、貧困や教育格差といった世界的課題に対して共感と行動力を示す姿に変わっていった。教室で学んだことを、現地において身をもって体験し、貧困やジェンダー不平等などのグローバル課題が、自分にとって決して遠い問題ではないと実感した様子が、さまざまな機会に垣間見られたことも頼もしいところである。また、日頃、科目担当者としては、学内で行うEGCのポスター発表会において、募金や寄付という安直な解決方法をアクションプランとして発表する学生が多く、改善の必要性を常々感じていたが、本研修に参加した学生においては、グローバル社会の複雑な問題構造と自分や日本の立ち位置を、相手（フィリピン

で会ったさまざまな人々）との関係性において見出すようになった様子が、前章掲載の振り返りコメントからも垣間見られる。このような変化を目の当たりにし、本研修が学生の感情・認知面に与える影響の大きさを改めて実感した。言い換えれば、本科目が当初目指した第1、第2の目的は達成し、個々の学生においては、グローバル課題の複雑性を実感し、「かわいそう」という感覚を乗り越え、問題の原因を内在化し、「自分ごと」とするに至ったものと思われる。こうした変化は、定性的な観察に加え、学生の自己評価にも明確に表れている。特に「グローバル課題への認識」と「主体性」の項目では、研修前後で顕著な向上が見られた。この結果は、学生の振り返りコメントにも見られる「他人ごと」から「自分ごと」への認識変化をデータが裏付けており、本研修が学生の意識と行動に大きな影響を与えたことを示唆している。

引率者としては、現地における学生の反応と振り返りを通して科目実施期間を通じた学生の成長を感じ、今後の国際英語科目や異文化コミュニケーション領域科目での教材開発や科目運営に向けて視野も広がった。本海外FSの引率は、学内や教室と異なる環境で学びの中にいる学生と接することができた貴重な機会となった。特に、コミュニケーションへの積極性や情報発信を得意とする本学部学生の特色を知る機会をたくさん得ることができた。学生の興味・関心や英語力は様々であったが、英語に不安を感じていた学生も現地の人々と積極的に交流する様子は特に印象的であった。なお、本FS科目は、2年連続で実施できたため、2年目の事前研修では、1年前に参加した学生の一部が進んで発表を用意し海外訪問に向けての導入を行ってくれたため、2つの学生コホートが連動する縦のつながりが築かれた。前年度の学生グループに対しては、2年連続で引率業務を行なった筆者の1人（今井）が、2年連続で訪問した箇所（ゴミ山、水上スラム）について、1年後の変化について報告する機会もでき、卒業

生も含む前年度の参加学生や2年目に同行していない前年度引率者(野村)も含め、オンライン上での活発なディスカッションが再開するなど、研修実施期間を超えた学びの継続性を実感することもできた。更には、学内における成果報告会や年度末の教員研修で、本FS科目について報告する機会を複数回得ることにより、学部教員からの関心や支持を広く得られるようになったことも成果と言える。

第1、第2の目的については一定の効果を得た一方で、第3、第4の目的については達成しきれなかったという反省があり、今後の改善の余地を残した。まず、本研修は、海外での学びを領域選択や専門的学習、卒業後のキャリアビジョンの形成に連動することを第3の目的としていた。訪問中や事後研修において、学生や引率者が言及するのは、EGCでの学びとの連続性に偏る傾向があり、他科目や領域、ゼミナール、卒論に向けた学びとの結びつきを見出し、相乗効果を図る様子は、2年間においてはあまり見られなかった。同じく、企業訪問についても、学生にとっては、製造業の工場見学や社会科学見学のよう場に留まってしまい、3年次からの就職活動やキャリア選択につながらなかった印象がある。来年度以降の実施に当たっては、本研修を国際英語科目の単純な延長としてではなく、学部カリキュラム全体において位置付けられるよう、事前研修における具体的な動機づけが必要と思われる。企業訪問については、現状進出している日系企業の多くは製造業ではあるものの、キャリア支援部門と連携し、本学部の学生が進路として選ぶことの多い業界についてもフィリピンで訪問が可能か模索や新規開拓を進めたい。また、引率・同行業務においても、今後は、3領域やキャリアを担当する教員からも広く協力を得ることができれば、学内と海外での学びの連結をさらに有機的なものにできるのではないかと期待する。さらに、本FS科目を企画した第4の目的は、参加学生からの成果報告など学部コミュニティへの学習成果の還

元を通して、身近の人々の気づきや意識変化へと結びけるアクションを起こすことにあった。個々の学生が、現地訪問や人物交流を通してグローバル課題に関する気づきを得て、身近な人々(家族や保護者、友人など)にフィリピンでの体験や学びについて共有したと事後研修終了後の打ち上げにおいても話しており、小規模ながらも現地での学びが、周囲に波及した様子も垣間見られた。その一方で、日本の大学で学び現地を訪問した参加学生たちが、グローバル課題の当事者としての意識を高め、貧困や格差の解決や持続可能な社会の実現に向けて、実際のアクションを起こすには、ここ2年間においては至らなかった。2023年、2024年の事後研修が、成果発表の準備会に留まってしまったことは、学生によっては短期留学や旅行、集中講義といった一過性の経験にも捉えられかねないフィールドスタディー科目の限界点であるが、本研修の継続にあたっては、事後研修の内容を工夫したい。以上の点を踏まえ、本FSの2年間の実践から得られた示唆として、(1)段階的な意識変容の設計、(2)問題の複雑性への理解を促す訪問先の配置、(3)現地との継続的な関係構築の重要性が挙げられる。特に、「見学型」ではなく「参加型」のアプローチが、学生の変容的学習を促進する上で不可欠であることが明らかになった。

今後の本研修継続にあたっては、学部で学んできたことを、海外で実体験し、領域学習とキャリア選択につなげることを主軸として維持したまま、毎年同じことを繰り返すのではなく、前年度の反省や中身の再考を繰り返し、より充実した研修を提供する必要がある。次年度に向けての具体的な改善策としては、現地での研修期間については、1週間前後を基準とし、図3に示したような行程が望ましいと思われる。

現地訪問については、3つの集落や家庭(ゴミ山、水上スラム、一般家庭)を毎年訪問し、コミュニティとのつながりを強化し、訪問先の状況についての定点観測を試みる。その上で、

1週	日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
午前	セブ到着	ゴミ山	水上スラム	一般家庭	企業訪問	新規訪問先 or プロジェクト	プロジェクト
午後		プロジェクト	プロジェクト	プロジェクト		交流会	
2週	日曜日						
午前	成田帰着						
午後							

図 3. セブフィールドスタディー行程案（2025 年度以降）

参加学生の数や興味・関心やニーズも毎年異なるため、学生と相談の上、もう1か所を各年度のオリジナルとして新規に選定する。企業訪問や学生交流については、先方の都合も左右するが、可能な限り、現地滞在の後半に予定することで、学生が前半の訪問先で感じたことをしっかりと消化し、振り返りを通して定着させた上で、現地の人々と共有する機会も確保することにより、単なる工場見学や交流の域を越え、より有機的な学びが実現できるのではないかと思われる。また、そのような場での、双方向型で持続可能な学びや交流の機会提供を実現するためには、現地の NGO や企業との連携体制の強化が重要となる。さらには、2024 年度においては、前年度から期間を短縮したにも関わらず、前年度と同じ数の現地訪問を詰め込んだ印象もあり、現地訪問を入れなかった時間が休息や自由時間となってしまった学生もいたため、今後の研修においては、ペア・プロジェクトに取り組む時間をしっかりと確保できるよう、無理のない予定を組む必要があるのではないかと思われる。

最後に、学部内の海外研修プログラムに共通する慢性的な問題として、長期休暇期間を利用した学部主催の海外研修は同時期に乱立する傾向にある。本研修も、参加学生の数の確保に苦勞をし、一定数の申し込みがないと旅行が催行できず研修が成立できないため、ギリギリまで具体案が組めない不安定な状況が例年続いており、毎年企画案の作り直しになっているが、余裕を持って訪問先の選定や現地との打ち合わせができれば、より充実した研修内容が可能とな

る。また、各年度の研修は、現状、10月の成果報告会でひと区切りになってしまっているため、学部全体へのアクションや行動変革への提案には繋がりにくいが、持続的な実施が可能となれば、長期的な取り組みや有機的な提案が実現できると思われる。本研修の今後の広報にあたっては、他のプログラムとの良い意味での差別化と共存を図ることが急務と思われる。特に、1年生を対象としたセブ語学研修との棲み分けと連続性を、両研修の担当者と確認をし、協調を図り、セブ・フィールドスタディーの独自性と意義・効果について、年間を通じて学部全体の学生にアピールをしていきたい。

註

- 1) 本研修における学生交流は、フランス系の NGO で、セブで教育支援事業を行う Passerelles numériques (PN) の全面的協力により実現している。PN セブ代表者とは、2018 年に東京で開催された SDGs 関連の教育カンファレンスにて筆頭著者が繋がりをもち、2018 年度からのセブ語学留学の実績があったことから、学生交流したいと相談をし、コロナ・パンデミック中や 2022 年度の下見を通して打ち合わせをして実現がなかったものである。
- 2) 本科目「課題提起型グローバル実践」(Global English in Action) の題目にも、フレイレ (2018) の課題提起型学習 Vygotsky (2012 等) の社会文化理論、グローバル語としての英語理論 (Crystal, 2003 等) の原著で使われた表現をヒントとして用いてい

る。研修立案にあたっては、これらの理論的背景をもとに、目的・目標を設定し、現地での研修内容の組み立てと、事前・事後研修におけるタスクの設定を行なった。複雑な原因が入り混じるグローバル課題の解決にあたっては、自他の理解と関係性の構築、他者との協働が必須である。グローバル社会の共通語としての英語、2年前期までに全ての学生が習得する3領域の基礎を、グローバルな場において実践し、3年次以降の領域学習やキャリア選択を通じて課題解決に取り組めるよう、最初の一步としての「気づき」をもたらすことが本研修の立案にあたった筆者らの願いである。また、立案にあたっては、順天堂の学是「人在りて我在り、他を思いやり慈しむ心、これ即ち『仁』」にも照らし、内容を精査した。

- 3) 報告書は、『セブフィールドスタディー 2023 年度夏季研修報告書』、『セブフィールドスタディー -2024 年度夏季研修報告書』として、PDF 文書で関係する教職員に配布した上、印刷・製本したものを、企画・引率を担当する本報告執筆者の研究室にて保管している。なお、本報告の後半に紹介する参加学生の振り返りは、これら報告書に掲載されたレポートからの抜粋であり、各コメントの引用後に、各年度の報告書に掲載されているページ番号を記した。
- 4) 各プロジェクトのタイトルの後に、参加年度とイニシャルを記載した。詳細について

は、各年度の報告書に掲載した学生レポートを参照いただきたい。

- 5) 各学生の振り返りコメントの後に、参加年度、報告書ページ番号、イニシャルを記載した。詳細については、報告書掲載ページを参照いただきたい。

謝 辞

本 FS 科目の実施にあたって、現地手配でお世話になった Be.Com 増田様、Passerelles Numerique のルチ代表、旅行会社様、現地ガイドの皆様、訪問先企業の皆様など、全ての関係者の皆様に感謝いたします。参加された学生の皆様のフィードバック等は、今後の研修内容の充実に役立させていただきます。

引用文献

- Crystal, D. (2003). *English as a global language* (2nd ed.). Cambridge University Press.
- パウロ・フレイレ (2015). 『非抑圧者の教育学 — 50 周年記念版 —』 三砂ちづる (訳). 亜紀書房.
- 今井純子 (2021). 「『グローバル市民のための英語』を振り返る—カリキュラムの黎明・創成から発展を目指して—」『順天堂グローバル教養論集』第 6 号, 117–126, 順天堂大学国際教養学部.
- Vygotsky, L. S. (2012). *Mind in society: The development of higher psychological process* (Revised ed.). Harvard University Press.